

未黒野

すぐろの

創刊六十五周年記念号

4月号 (通巻776号)



寒
旱

小川玉泉

山茶花を丸く掃き寄せ禅の寺

枯れもせず北風受くる川柳

香り立ち坐りのわるきラ・フランス

初国旗末黒野六十五周年

屠蘇散を加へ徳利の酒五勺
真似事と傘寿の妻の年の酒
寒灯下妻のひときは小さかり
寒三日隠れもあらぬ雪の富士
指先に確かめ桶の初氷
底冷えや手すり頼りの磴二十
踏み石の坐りのゆるび寒早
春近し千両を発つ鳥の声

凍て

松本三千夫

しののめを声捨ててゆく初鴉
門出でて先づは鴉の御慶かな
賀状来る手描きの兎耳垂れて
家族名に加へ犬の名賀状来る
寒九の水喉真つ直ぐに落としけり
魚市場糶の符丁の息白く
米飯は夕食のみや根深汁
マフラーのひとの残り香草城忌
寒禽や同姓多き島の墓
彫深き十二神将堂冴ゆる
星屑の凍てて張りつく厠窓
ふつくらとしか冬芽を幣しで辛夷

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

注連飾

黒滝志麻子

初糶の果ててふくらむ波の音
磯山に海光とどく淑気かな
一病を持ちての日々やちよろぎ囃む
水軍の滅びし浦や注連飾
旅に出てまでも大根干す話
廃船の蔭より声や夕千鳥
傘立に杖の色どり日脚伸ぶ
山を背の眼下に寄する寒怒濤
探梅や女七人尾根伝ひ
夕鴨に明日を約す茜空

冬の日

田中臥石

年酒酌む友光陰の一過客
初氷割れつつ光る轍道
初句会どの顔もみな輝やきて
冬の日や手熨斗で畳む日章旗
寒晴の牛十頭の咀嚼音
牛小屋の冬蒲公英や海の音
寒潮の遠退き牛の乳搾り
癌癒えて妻七種の粥を炊く
駅離る雪の外房電車来ず
寒行の辻曲りゆく鉦の音



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

初 明 り 安 斎 久 英

初日待つ上総下総指呼の闇
過不足もなし数の子の囁み心地
黒船の現れしあたりや初明り
懐に大湖を抱き山眠る
明け近き寒オリオンを湖の上
虎落笛富士漆黒の闇纏ひ
木の葉舞ふ籠坂峠九十九折

寒 梅 大橋伊佐子

枯蓮の修羅場を渡る時の鐘
山茶花の散るや添水の音の澄み
祇王寺の木の葉ふる日を訪ねけり
枝移る禽に寒梅ひらき初む
外の風の叩ける音や紙を漉く
着ぶくれて心の若さ失へり
大灘に船影見え寒に入る



齋 粥 岡田史女

雪吊や百本の縄引きしぼる
元朝の閃々と竹林かな
嫁ぎきて四十五年齋粥
寒林を抜けきし声の透きとほる
からからに土乾きをり寒椿
嚏のつづけざまなる祝詞かな
紅梅へ日輪うすき一と日かな

葛湯吹く 小倉正穂

小枝より冬日零して野鳥たつ
踏むに鳴る枯葉やいのちある如く
花枇杷や蒼むまで拭く窓硝子
まだ硬き空やはらげて冬桜
山の日に刷かれて紅き冬木の芽
年の夜の湯に一年の力抜く
退屈も倅せのうち葛湯吹く

浮寝鳥 乙坂きみ子

産土神の森の闇濃き淑気かな
水盤に微塵の泛ぶ五日かな
浮寝鳥流されつつも群れ解かず
切株の年輪匂ふ冬日かな
笹鳴のふたたび近き写経かな
波の音間近に聞こゆ野水仙
寒月や幹に忘れし竹箒

除夜詣 菅野日出子

役者絵の羽子板照らすうす灯り
扇塚にあふれし去年の舞扇
歳の市抜け山門の大草鮭
竹筒にともる万灯除夜詣
山鳩の番むつめる初景色
烏賊の腸ぬるりと抜けて寒厨
虎落笛人の気配に付く門灯

夜の秋

大橋伊佐子

花の芽の一夜に色や西行忌
花の雨師の句碑訪うてみちのくに
囀りや地にやはらかき木々の影
彼岸会や母の形見の袖着る
絶筆となりし桜の誘ひかな
棚曇る日にほひけり栗の花
捨て惜しむ世代の一人更衣
海女潜き卵波に遊ぶ桶二つ

降り足らぬ空の気配や花棟
初河鹿峯とつぷりと暮れてをり
逃げ水やカーナビ頼る未知の里
岬の灯の星に連なる夜涼かな
夜の秋星に濡れつつ行く渚
吊り橋に残る夕影鮎の里
坐つても立ちても汗の一日かな
野の花を生けて一人の良夜かな
明日ありと信じ八十路の冬用意
柵の花香や咲きし日を知らず
短日のビルを上りぬビルの影

努力賞受賞作品抄

花ミモザ

有賀鈴乃

鯉の子の跳ねては光る浅き春
夕映の彩の移ろひ花みづき
雨あとの翳りなき空花ミモザ
夫の忌を修する読経や花の昼
藁屋根に枝垂るる花やとの曇り

努力賞受賞作品抄

新茶汲む

占部美弥子

日表に紅鮮やかや寒椿

公園のベンチ新し春の風

北上川を勢ひて下る雪解水

樽りや遙かに海の展けをり

新茶汲む手許より香のひろごりぬ

努力賞受賞作品抄

青
簾

川村 亘子

昨夜よりの雨に膨らむ春の土
香焚きてひとりも良けれ春の闇
押し寄する春の怒濤や実朝忌
花冷えの暗き御堂や観世音
高階に夕べの日差し青簾

努力賞受賞作品抄

山の雨

亀卦川菊枝

涅槃西風荒磯にたまる波の音

磯あそび弾けし波をかぶりけり

白子船光撒きつつ網洗ふ

蹠を濡らす流れや花胡桃

炉話の途切れ聞こゆる山の雨

短 日

竹内涼子

里山の日差しに透ける蝌蚪の紐
円を描きいよよ数増す春の鳶
夕若葉四方の鴉の啼きつぎぬ
荒布干す磯や小船の島めぐり
雁や苔むす石の道標

努力賞受賞作品抄

道標

谷貝美世

花散るやかたつて遊びし花月園

花屑の川を狭むる流れかな

薫風や総身のほぐれ覚えをり

筑波嶺や風駆け抜くる青田道

薫風やまづ目をとほす旅の欄

新人賞受賞作品抄

葱坊主

青木由芙

里の子のぐづりて叩く葱坊主
古着市絹地にまとふ春の蠅
潮風や崖の寸土に諸葛菜
托鉢の草鮭ふれゆく董草
行く春や壁紙替ふる美容院

新人賞受賞作品抄

あさり売り

稲垣佳子

春泥を蹴り流鏝馬の始まりぬ

押し合へる夕べの淵の花筏

深川の路地知りつくしあさり売り

をんな着る印半纏祭来ぬ

櫛の目の著き結髪三社祭

夕 焼

大内由紀

春めくやアップルパイのさつくりと
摘みてきし菜の花飾る厨窓
草青み犬に従ふ散歩かな
神田川雲に乗りたる花筏
振り返りふり振り返り見る夕焼かな

新人賞受賞作品抄

四方の水田

鈴木俊孝

裏山の桜見に行く握り飯

河岸を行く夕オルの漢朝霞

花水木こぼれて押すや車椅子

鍬洗ふ四方の水田の夕蛙

軒下に夕雲掴み蜘蛛巣張る

天平の礎石

石黒興平

森のみな古墳に見えて秋の声
晴れ渡る刈田に隣る遺跡かな
天平の礎石の湿り草の花
秋蝶の纏れもつれて吹かれをり
さながらに飛天の衣や秋の雲
耳成山の山気を深めけらつつき
秋風の白きに染まる石舞台
昼昏き玄室にわく秋思かな

音の無き野川の流れ蘆の花
みささぎの畝傍山麓鬼やんま
秋うらら客吾のみの路線バス
緋衣草破風もつ駅舎閑かなる
ざつくりとコスモスを活け村役場
色変へぬ松百態の古刹かな
千年の七堂伽藍新松子
寺裏の小路の暗し虫の声
夕照の天の香具山鳥渡る
仕舞屋の土産売る土間昼ちちろ
歩くほど詩心いや増す花野かな
爽籟の甘樫の丘去り難し

年間優秀賞（平成二十二年）

乙矢集

優秀賞

準優秀賞

炎天を来て荷崩れのごとく座す
帽子より大きな笑顔入学す

大橋伊佐子

松田 泰子

青炎集

優秀賞

準優秀賞

灼くる道ここまで来ての勘違ひ
島人の抜け道暗し花きぶし

高橋 明

城戸 緑

耕土集

優秀賞

準優秀賞

ぼろ市の売手どつかとぼろの中
夕月を水田に残し鍬洗ふ

神谷さうび

鈴木 俊孝

◆特別作品年間優秀賞作品（平成二十二年）

優秀賞

下町の夏

稲垣 佳子

春 逍 遙

青木 由芙

準優秀賞

水打つて門前町の昔菓子

引綱に春の泥つけ畦の牛

境内の瀬戸物市や日の盛り

灯籠に残る戦禍や梅まつり

山車を引く紅さす子等の豆しぼり

土手高き大木戸跡や草青む

半玉の夏帯宵の向島

托鉢の草鮭ふれゆく董草

裾端折る腰に団扇の男衆

草若葉力競べの石ふるび

駒形のどぜう屋奥の夏座敷

山菜莢の花映りをり釣瓶井戸

墨堤の子育地藏草茂る

残雪の足跡うすし獣道

吉良饅頭本所松坂夏兆し

小旗立て漁師一人の白魚舟

夕涼の竹の縁台小ざぶとん

木の洞に根付きし藤の芽吹きかな

銭湯の唐破風の屋根月涼し

海棠の花の雨呼ぶとの曇

万 仞 集

山茶花の散りてより知る盛りかな	母卒寿庭の冬菜を間引きをり	飴色の干大根や浦の風	歳晩や鳴る家苞の竹の炭	買初や願ひ込めつつ母の杖	五欲の身沈め柚子湯をあふれしむ	初めての曾孫抱く重み福寿草	お手玉を柚子もて教ふ冬至風呂	昼の香を夜は包み込み寒牡丹	枯れてなほ色を残せり鶏頭花
河合とき	森清堯	辻井ミナミ	磯田美津子	新堀満寿美	加藤八重子	田村加代	村井一之	林美与子	波多野孝枝

初鳥己が餌と呼び合へり	高橋明
わが庭と言はんばかりや初雀	戸田澄子
凍て月や零れて光るピラカンサ	川村一旦子
惜しみなし初風呂の湯を溢れしめ	杉山弥生
四世代揃ひ抱負を筆始	立野千鶴子
宝船敷きて夢なく覚めにけり	小山ほ子
白髪を包むバンダナ煤払	浅川幸代
初風呂やまろき石鹸泡立てて	大橋弘子
嘴を背に即かず離れず浮寝鳥	上村光八
片付けの過ぎて不自由年の夜	今泉あさ子

巨林抄

幽谷の幣の新し冬の滝	朝日さし野のやはらげり霜の花	眠れずに昼見し鳩を数へけり	綾取りの川よ橋よとちやんちゃんこ	古希迎ふ母に倣ひて毛糸編む	墨の香の写経に暮るる三日かな	大屋根に落ち小屋根落ちしづり雪	冬ざれや水輪の如き鐘の音	寒参り闇より来ては闇に消え	動くもの寒禽のみの社頭かな	いろいろ焚く茅葺き駅舎客一人	籠に盛る七草名札より小さき
伊藤平八	山田本女	米山やすえ	細島孝子	和泉道草	皆川千佐恵	半沢一枝	鶴見董子	鈴木英男	村田慶子	石井勇	中村弘